
嘘吐き魔導書は間抜けな人間と

融点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘吐き魔導書は間抜けな人間と

【Nコード】

N9225U

【作者名】

融点

【あらすじ】

現段階で書いたらネタバレになりそうなので内容は伏せときます。タイトル通り、魔法ものです。期待しないで読んだほうがいいかと。

プロローグ

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

少女は走っていた。暗い、石造りの古めかしい屋敷の中を。抱えているのは一冊の本と白と黒の二色だけで色塗られた剣。きつと誰から追われているのであるう少女は、時折背後を振り返りながら走り続ける。

「はぁ・・・はぁ・・・だ」

少女は立ち止まった。

一人なはずなのに、どこからか声が聞こえてきた。

「おいおい、だいじょーぶかー。しっかりしろーい。あきらめちゃうわけ?」

少女はにっと笑って、「まさか」と舌を出す。

「しょーがないなあ。こうなったら最終手段だ」

「おお、あの手か。どーぞ。今までありがとーなー」

「いやあ。てれるなあ・・・じゃなくって。じゃあ、いくよ?」

少女は、胸のあたりに本と剣押し当て、そのまま中に入れ込んだ。体と本の境界線は白く光り、特に抵抗もなくすべておさまった。

少女は何かを確かめるように何回か胸をたたくと、「よし」とつぶやいた。

「さあつて。 魔導書『真実』の華麗なる逃亡劇のスター
トだぜ」

少女は、また走り出した。

プロローグ（後書き）

多分続きます。

第一章 1 1 「多分日常」(前書き)

続きました。

第一章 1 1 「多分日常」

魔法、なんてものがあつた。

そんな国家機密　　とか、知つたものは殺される　　とか
言つた事情は一切なく、一般人にも認知されているし、公然と研究もされている。

理論とか科学的根拠とかはないが、魔法が存在することだけは証明されている。

ただし、一般人に使うことはできない。

それは才能や血統が必要という定番の理由で、試そうとした人間の中には死亡したものもいるほど、魔法とは危険なものだったりする。

魔法使いとは一種の人種であり、職業名でもある。

以前は迫害なんかも起きていたが今では根絶され、共存関係が成り立っている。

法律なんか魔法使いにも適用されるが、証拠隠滅、もしくは捏造の可能な魔法使いを捕まえることは極めて難しい。

そんなわけで、魔法使いは人間に嫌われている場合が多い。

「　　てな感じです。わかりましたか？篠原君」

「ええ。とつても」

黒板の前に立つた教師は、先刻自分が椅子に丁寧にしぼりつけた生徒に優しい笑顔を向けた。

「それならよかったです。」

では、なぜ授業をさぼつたの

か、理由をお聞かせ願います」

「だからあ、さっきも言つたじゃないですか。」

俺の持つ

ている十万何千冊の魔導書を狙った敵と毎晩戦っているんです。そして、その追手がやってきたのでみんなを巻き込まないために学校から離れたんです。本当に、僕のせいでみんなを危険に巻き込んでしまってますいませ

だあだだだ

ただっ！先生、そんなところに関節がある人間はいないしそんな方向に腕は曲がりませんっ！！！？？」

「ああ、そうですか」

描写するのも恐ろしいとはまさしくこんな時のためにある言葉だ。教師は篠原から手を放すと、再度詰め寄る。

「で、本当に本当の理由はなんですか」

「だからさつきから言ってる通り」

二十三回目の事情説明に、先生は「・・・はあ」と盛大にため息をつき、

「ではもういいです。」

次がないことを祈ってます。も

う下校時間は過ぎていたのでさっさと帰ってください」

「・・・本当なのに」

少年のつぶやきは無視して、教師は教室を出て行った。ぶつぶつ愚痴を言いながら、篠原は帰宅した。

夕暮れの中、篠原は一人さびしく道路を歩いていた。

「いやあ、災難だったな相棒。まっさか真昼間っから襲ってくるのはよお」

茶化したような声が、どこからともなく聞こえてきた。

どこから？と聞かれても困るのだが、しいて言うなら篠原の体の中から、だろうか。

「その相棒っていうの、気持ち悪いからやめてくんない？いつから俺達ってそんなに仲良くなったんだっけ？」

「おっとそりゃ失礼。じゃあ篠原」

あの尾行してきてるや

っについてでも、話し合おうじゃないか」

いきなり声のトーンを変えてきた。篠原もその話をしたかったので話題に乗る。

「・・・話し合うも何も、対応法はひとつだろ？」

「はっ、そりゃ正論だ！」

気が付かれていたことによろやく気付いたのか、背後から魔法使いと思しき人影（人と表現していいのかどうかは不明だが）が篠原との距離を縮める。手を振りかぶり、恐らく何らかの魔法をかけたその手で篠原を手につかろうとする。

「よっ、と」

体の中から白と黒を基調とした剣の柄だけを出すと、一気に引き抜いてその勢いのままグルンと振り返った。

ついでに、魔法使いの体が上半身と下半身に分かれる。（ついで？）

崩れ落ちた下半身と何メートルか先に飛んで行った上半身を見て、篠原はポリポリと頭をかいた。

「・・・ありゃ。終わっちゃった」

自分としては、いったん弾き飛ばしてからいろいろやろうと思ってただけだ。そんなことを考えながら証拠を隠蔽し始めた。

まず誰ともわからぬ魔法使いの体を魔法で限界まで遠くの山に移動させて、周囲の人やカメラなどから記録を一切消す。（もちろんその前に剣を体にしまってから）

「ん。こんなもんだろ」

満足げに笑ってから、篠原は家に向かって再度歩き出した。

「悪いけど、誰にもこの魔導書「真実」を渡す気はないっつーの」

1 2 「出会いと別れは突然に」

魔導書。

魔法の使い方や呪文、魔法円などが書かれた入門書。

叫ばなかったのは、僥倖だった。
きつと魔法使いの死体で慣れていたからだろう。
見慣れた光景が血の海になっていても、篠原は冷静に思考回路を働かせることができた。

自分の家じゃない。その隣の家にはいた。
マンションだから部屋と呼んだほうがいいか。とにかく、篠原の部屋の隣は幼馴染の部屋だった。

クラスも高校生になった今も一緒。仲がいいというより一緒にいるのが当たり前というような関係で、恋人とかそういうわけではなかったが、仲はいいほうだった。

『借りてた本を返すから家に寄って』

そんなメールが来たから、行っただけだったのに。
それなのに。

「……あれ？」

惨状の中に似つかわしくない少女がいた。

背丈は小学校六年生くらいで、服装は真っ白なドレスだったもの。過去形なのは返り血で大部分が赤く染まってしまっているからで、同じく根本は青い腰のあたりまである髪も裾のほうは赤くなっている。

そんな少女は深紅の目で周囲をくるくる体ごと動きながら眺め、
そして

「なーんだ、またかあ」

大して悪びれもせず、言った。

本当は激怒すべきところで

篠原はその場に座り込んだ。

「あ・・・あははははは」

逆に、笑いが噴出して来た。

少女の足元には、幼馴染の両親だったものが転がっている。

無残、なんて言葉では表せないほどにバラバラにされていた。

自分の足元には、幼馴染が心臓を一突きされただけのきれいなま
まで転がっている。

それでも、そんな光景を見ても、「しょうがない」としか思えな
かった。

「そうか・・・俺には何もないんだ」

それは、言葉通りの意味だった。

あれ？と言いたげな顔で、少女は篠原のことを見た。

「・・・誰？ なかに入ってるのは、なに？」

「ああ、そうか。 魔法使いか」

篠原は丁寧に教えてやった。

「俺はお前が殺したこの人たちの知り合いだよ。で、中に入ってる
のはお前らが血眼で探してる魔導書『真実』」

それから、白黒の剣を取り出した。

「どうする？俺のこと、殺してみる？」

返ってきたのは、思いがけない返事と表情。

少女は素敵な笑顔で、こういった。

「断る」

「へ？」

幼い外見に反して、言葉遣いは古臭かった。

「だって、すごい強いって噂だし。それに、わたし『真実』なん
て知らないし」

日常的に魔導書目当てで襲われる篠原にとって、そんな考え方の魔法使いがいたことは驚きだった。

少女は「そのかわり」と続けて、

「あなたが欲しい」

「……は？」

少女は言葉が足りなかったと反省して説明をする。

「えっと、わたしの一族は代々感情と魔法が一致しない。使いたくなくっても、使う気がなくっても、自然に使っちゃう。日常茶飯事になるくらい、気が付いたら人が死んでる。だから、あなたに止めてほしいの。わたしの枷になってほしい」

確かに、さっきの教師の話の中にも「気が付いたら人を殺しているような魔法使い一族もいるので気を付けるように」というのがあった気がするし、100%ありえない話でもないかもしれない。

「……駄目？」

断ってもいいけど、このままこいつを放っておくほうがはるかに危険だ。

篠原は、軽い気持ちで答えた。

「ああ、いいよいいよ」

「……少し適當過ぎる気もするが。」

日常は終わりを告げ、非日常が嘲笑うかのようにやってくる

……いや、毎日のように魔法使いと戦うことを日常と言えるのかは知らないが。

1 3 「麻衣は麻衣じゃなくなった」

「いいか」

少年の前には正座する少女。少女の姿は死んだはずの幼馴染そっくり、というか本人。

服装はきれいになったセーラー服で、髪の毛は短めの茶髪。

「うん」

声すらも本人そのものなそいつは、しかし本人ではなかった。

「お前は今から園原麻衣だ。性格はわかっているな？ その通りに行動しろよ。いくら魔法でサポートできるとはいえ敏感な人にはバレるかもだぜ」

「はぁーい」

「お前は、両親が行方不明になっちゃった可哀そうな子で、三か月くらい一人暮らしって設定なんだからな。ちゃんと演じるよ」

「うん。大丈夫」

「演じるのは、結構得意だから」

ちよつと前。

「で、この惨状をどう処理するよ」

隠蔽は至極簡単だ。なんだったらこの一家が元々いなかったことにすればいいし、一家心中でも計ったように見せるのも簡単。いつ

も魔法使いに対してやってきたから慣れっこだ。

しかし、少女は驚くべき結論を出した。

「んーとね。わたしと、交代する」

と、言う少年の幼馴染の服を脱がせ始めた。

ようやくその言葉の意味を理解した少年は、慌てて少女の行動を止めた。

「ちょっと待て！お前は『化けの皮』術式を使う気だな？」

少女は無邪気な笑顔で「うん」と答えた。

『化けの皮』とは文字通り自分の上に他の人物を着る魔法のことで、主にその化けたい人の服や身に付けていたものを身に着けることが条件。上級者なら髪留めひとつでも大丈夫だが、記憶などを完璧に受け継ぐには直前まで着ていた服がふさわしい。（服の古さ、新しさはあまり関係ないんだとか）

補足すると、魔法の術の名前は適当なものが多かったりする。

「だったら先に言え。俺は外出てっから、終わったら呼べよ」

「?うん」

まったくだの、こっちの気持ちも考えろだの愚痴を言いながら篠原はその部屋を出た。

篠原の幼馴染の服を脱がせてそれを自分が着て、しばらく考えてから床に裸で転がる少女に今まで着ていたドレスをかけた。それからその場で一周し、どこで変わったのかよくわからなかったがとにかく元の向きに戻るまでにはあの幼馴染の少女の外見が変わっていた。

「終わったよー」

その声を聴いて部屋に戻ってくる篠原。

「どっ?あんまり使ったことないから自信ないんだけど」

「ん。・・・ああ、大丈夫。そっくりだよ」

「えへへ。さんきゅー」

さて、と篠原は気を取り直して

「で、初めに戻るけど。この惨状をどうするよ」

「私こういうの苦手だからさあ 篠原がやっついてよ。ね？」

篠原は少女の頭にチョップした。

「あだっ」

「あいつの真似してごまかすな。・・・まあ、本心だったら俺が勝手にやっつくけど」

「あ、本当に？じゃあ、お願いしちゃうかな。わたし、隠蔽とかやんないからわかんないもん」

篠原は一分ほど考えた設定を提案した。

少女はそれでいいよ。と受け入れた。

「そついえば、お前の名前は？」

「園原麻衣だよ？」

「そつちじゃなくて。お前自身の名前だよ。二人のときも麻衣の名前使うなんて嫌だからさ」

「えー。特にないよ」

「・・・真面目に？」

当然のようにうなずく少女に、軽くカルチャーショックを受ける篠原。

「んー。じゃあ適当に付けて」

篠原はさっき設定を考えた時の三倍くらいの時間がたった後で、

「・・・ミウ、でどうだろ」

打って変って自信のなさそうな提案に、少女は

「うん」

笑顔で、小さくうなずいた。

1 3 「麻衣は麻衣じゃなくなった」(後書き)

ミウの名前はただ単に「まい」の一個下(五十音表で)っただけです。深い理由があつたわけじゃないんです。ちなみに魔導書さんは寝てましたw

1 4 「彼を取り巻く環境と」(前書き)

箸休めのな軽いクラスメイト紹介です。適当に書いたので適当にお読みください。

1 4 「彼を取り巻く環境と」

早朝。どこかの教室。

教卓に足を乗せて偉そうに座っていた少年は、新たに教室内に入ってきた少年にこれまた偉そうに語りかける。

「やあイクサ君。よく来てくれたね。歓迎するよ」

「・・・はあ」

これはため息ではなく遠慮がちな返事です。

決してため息

なんかじゃありません。

「このグループで目指すことはただ一つ

魔導書『真実』

を手に入れること！」

ちよつと興奮しちやつて椅子から落ちそうになつちやつたことは秘密だつたりするのです。

少年は立ち上がり、イクサに右手を差し出す。

「そのために、君を最大限利用したい。もちろん、そちらもこちらを利用してもらつてかまわない。・・・利用できたら、の話だがね。くつくつくつ」

しかしイクサはそれをスルー。周囲の笑いに顔を赤らめながらも声高に叫んだ。

「我らは名もなき集団『グループ』！日々探求し、挑戦し続けるものなり！」

「・・・いや、名前あるじゃないですか」

イクサのツツコミに、誰もが頷かずにはいられなかった。

「何やってんだよ。藍氏」

「あー、藍氏くんじゃん。おっはよーっす」

入ってきたのは篠原と園原（中身は違うけど）だった。

「ああ、篠原に園原か。はらはらコンビだけにそろって登校か。仲がいいな」

なんというか、藍氏君には一生『真実』は見つけられないと思います。あくまで勘ですが。

一応藍氏は魔法使い。そこまで強いわけではなく、主に研究などで目立つことが多い。

真実を探しているのも研究の一環で、どちらかという自分が使うとかはどうでもいいようだ。

「あーえつと、やっぱり遠慮しときます。俺、なんか藍氏先輩の顔を見ると殴りたくなるってことに気が付いたんで」「あつちよつと待
」

藍氏の静止を振り切って、イクサは教室を出て行った。

「・・・いやー。今日も平和だなあ」

誰かが言った。

「おはよー。しのはら・・・」

教室に入ってきたのは、全身ずぶ濡れの少女だった。

別にいじめられていて朝っぱらから水をぶっかけられた と

か、運がなくなつて間違つて道路に撒く水をかけられた とかで
はなく、自分でかけているのだ。

よく理由はわからないが、「みずがないとしんじやうー」だそう
だ。いつもぼーっとしているが、プールの時間は超元気。ちなみに
見た目に反して結構すごい魔法使いで、しかし得意なのは炎系魔法
なので使うと水分が蒸発するために大量に水をかけなくっちゃいけ
ないけどかけてもかけても蒸発するのでこの学校では「まどろっこ
しい」の代名詞となっている。

「おはよ水代。水分足りてるかー。かけてやるうか？」

「・・・さつきかけたからだいじょーぶ」

緩慢な動作で自分の席 篠原の後ろ 　　　に座ると、ぐてつと
いう効果音がふさわしい感じで机に突っ伏した。

一切動こうとしない水代に、心配そうに帯刀少女が声をかけた。

「本当に大丈夫ですか？・・・さすがにちよつと不安になりますけど」

「んーんーんー。だいじょーぶだいじょーぶ。きにしないのでーほつといてー」

魔法使いと人間は大体の学校で同じクラスになっている。もちろん魔法使い専門学校や人間専門学校もあるが、数は少ない。この学校も共学で、「魔導書持つてるって気付かれないの？」とか考えるだろうが、何重にも魔法でごまかしてあるし、そもそも中に何か入っているとかわかるのはごく一部の感覚が鋭い魔法使いのみだ。

高校生ぐらいでそんな才能が開花している奴はこの学校にはいない。よつて疑われたこともなかった。

「おっはよー。篠原」

「おいつす篠原」

「ああ、篠原かぁ。お前いつも早いよな」

「おはよう。篠原君」

今日も平和だと、誰かが言った。

ずっとそんな日が続けばいいのにと、誰かが思った。

それはかなうはずのない願いで、

だからこそ、変えるのだと誰かが誓った。

誰かが死んで別の誰かに代わっても、中身がおかしくなったとしても。

それでも、世界は続いていく。

1 4 「彼を取り巻く環境と」(後書き)

続け。

第二章 2 1 「学校のこととかそついう感じ」

共学校では、時々魔法使いと人間の交流のため、というか理解しあうために、ではなく、人間に魔法使いのことを理解させるために魔法の授業を行っている。

五・六時間目に行われるそれは、案外双方からの人気が高い。

理由は、魔法使いのほうは単純に練習ができるからで、人間はもちろん「見てるだけでいい」から。

そもそも人間にできることもなく、こんなカリキュラムを作ってみたはいいものの、どうやって何を教えたらいいのか教師にもわからない。授業でも教えてはいるが、それは人間が作った教科書に沿っている。

結局、こんなことに大した意味なんてないという結論はとっくに出ているが、情性で続けている状態だ。

場所はわざわざ作られた魔法に耐えられるつくりの体育館で、大体二クラス合同で行われる。

人間はギャラリーから鑑賞する。魔法使いは専用に雇われた教師の指導に沿って、魔法を使っていく。

興味のあるものはギャラリーから身を乗り出す勢いで見ているが、ないものは後ろのほうで座ってしゃべっている。

篠原は後者のほうだった。

「・・・あー暇」

興味がない理由は、「だって自分で使えるし」。

ほかの連中が「どーせ使えないし」と思っている中で、ばれたらひがまれそうな理由だった。

麻衣、に扮したミウも自分で使えるんだから興味があるわけない

が、麻衣はそうではなかった。ので怪しまれないために前のほうで楽しそうに（装って）見ている。

「ひーまーだー……」

横でぐてつと寝転んでいる少女が言った。

「時に水代」

「んー？」

「なんでお前、ここにいるんだよ」

「あそこにいったらねっきでしぬ……」

魔法使いのはずの水代は炎魔法が練習されているところを、人の足の間から指さして言った。

篠原は苦笑し、

「お前炎魔法得意なんだろ？練習すればもっと半端なくなれんじゃねーの？」

「もーじゅーぶんとくいだからい」

ミネラルウォーターの入った二リットルペットボトルのふたを魔法で開け、そのまま自分にかけて。

「ふい……。いきかえるぜ」

床がびしょびしょになっているのはどうでもいいようだ。

「ああ、いたいた水代。センサーめっちゃくちやおこっているぜ」

「

「む。せんせーにはこういって『しんじやうからいけねー』っていつといて」

「無視無視」

「いやーだー」

迎えにやってきた同級生が水代の首根っこをつかんで引きずっていく。

「あ、そだ。篠原。お前もちゃんと見てないと駄目だぜ」

いきなり振り返った少年が篠原にいう。

「えー。なんで」

「うん。センサーが『篠原は今日見てなかったら土日返上で感想文

と反省文を書かせてやるう』みたいなことを

「さんきゅー！名前忘れたけど同級生君！」

「・・・おーよ」

速攻で立ちあがった篠原は慌ててギャラリーから身を乗り出した。なぜ教師がここまで篠原に厳しいのかというと、「魔法に関することだけまったくもって関心がないから」

他の教科や行事に関してはそこそこ優秀でテストの成績もなかなか篠原だからこそ、「なんでやらないのか」という疑問が生じる。魔法使いとの確執があるとかだったらわかるが、篠原は理由を言おうとはしなかった。ごまかしもせず、適当な理由を作ったりせず、彼はこういったのだ。

『理由はある。だけど言えない。先生だけじゃなく、誰にも言わないうって決めたから』

それを教師はただの反抗とみなしたらしく、それ以来より一層教師はしつこく言うてくるようになった。

「うーわー。すっげー」

見ると、さつき連れて行かれた水代が炎で龍を作っているところだった。

教師も思わず見入ってしまうようなすごい魔法なのに、本人は平

然と 床に寝そべっていた。

それを悔しそうに大半の魔法使いが見つめる。

「・・・いやー。本当に世界って不公平だよなあ」

心底、そう思った。

2 2 「二人の朝」

「ねーねー篠原。今日は重大発表があるんだけど」

「こっちも言いたいことがある。自分だって篠原のくせしてなぜに俺のことを篠原と呼ぶ」

時間は朝。場所はリビング。相手は姉だった。

姉と二人暮らしなので、必然的に二人きりになるのだが、この姉がまた曲者だ。

朝食のトーストをかじりながら姉は続ける。

「いーじゃない別にいい。篠原は篠原でしょーよ。そのほうが呼びやすいし、そっちだって呼ばれなれてるんだろー？」

口いつぱいに頬張りながらも聞き取りづらくならないというのは一種の特技といえるだろう。

篠原はなんとなく腑に落ちない顔で、「まあいいかあ」とあきらめ改めて聞き直す。

「んで、重大発表って？」

「ん。やつぱいいいや」

「・・・気になるだろ。言えよ」

「なんかさあ、出鼻くじかれたっからいうの嫌になっちゃったんだよね。まあ、帰ってきてからでもいいし」

「よくない！気になって授業なんて手につかねえよ！」

「そんなことこっちにはまったくもって関係ないもん。一日中悶々と思えばあ？」

「あーもーごめんなさい！謝るから許して！そして教えてくれ！」

篠原は立ち上がって頭を下げる。

姉は偉そうにコーヒを一口すすつてから、

「しょーがないわねえ。・・・あ、そういえば麻衣ちゃんうちの空き部屋に住むことになったから」

「そんなことはどうでも・・・って。あの、なんて仰いました？」
「麻衣ちゃんがうちの空き部屋に住む。えっと、で、重大発表って
いうのはさ」

「待って、待とうか！つーかそれより重大なことってあんのかよ！」
「姉ちゃん会社クビになっちゃった」

「それは朝、しかも朝食の最中にいうことじゃないっ！」
「弟の必死の剣幕に対して、姉は明るく言った。

「大丈夫大丈夫。昨日クビになった会社から帰ってくる時面接受
けたらひょいっと受かったから。今日から働いていいって」

「・・・本当になんかもお、姉ちゃんつてすげえな」
「むふふ。姉ちゃんをなめんじやないわよ」

篠原はスープを飲み込んでから仕事について尋ねた。
「仕事って、何の仕事？」

「ああ、セールスよ。化粧品とか新聞とかを一般家庭に売り込むん
だつて。買い取り方式じゃないからこつちは損しないからあんしー
ん」

「へー。・・・ちなみに、どうやって面接受かったんだよ。その場
に行つてひょいっと受かるとかありえねー」

「えへへ。そこは腕の見せ所なのです。・・・いや、それよりも面
接させてもらうまでのがよっぽど大変だったかも」

「・・・どんな手使ったんだ」
「・・・」

「どうやら言えないような手を使ったようだ。

「隠すように、姉は話題を変える。

「そつだ、麻衣ちゃんのことだけど、篠原の隣の部屋あいてるじゃ
ん？あそこにしたから」

「え？つーか麻衣呼ぶんなら俺に一言言つてから」
「ほう、言つてから強行しろと。なるほど、参考にしておく」

「・・・相談してから決めてくれ」

姉はトマトにフォークを指しながら不思議そうな顔をした。

「だって、篠原と麻衣ちゃん仲良かったじゃない。だからいいかと」
「そういうことじゃなくて」
「あ、もう八時過ぎてる」
「うっげ！じゃあ俺行くから！続きは帰ってからな！」
「ええ。麻衣ちゃんも加えて三人で」
「・・・もっいいい！」

こんな感じで、篠原はいつも遅刻ギリギリです。

2 3 「そんなこんなで」

「えっと、よ、よろしくね！篠原」

まさか、こんな設定にしたことがこんなことになるとは思っていなかった。

「・・・ああ」

両親は行方不明。残していった貯金で生活している。一人暮らし。一番簡単な感じにしたはずだったのに。

『だってほら、女の子一人とか物騒じゃない。うちだって部屋余ってるからさ、家賃も節約できるし。うん、一石二鳥ってこのことよね』

まあ、監視するにはちょうどいいし、結構便利なのかもしれないけど。

「そうだぜ篠原。物事はいいほうにとらねえとな。体は麻衣ちゃんなんだから夜中突然押しかけて襲っちまうって手も・・・」

「自重しろ」

自分の胸をこん、と小突いた。

今はミウと自分の二人だけ。姉は仕事で帰ってきていない。

「でも、もし魔法が解けたら一瞬ではれるじゃん」

「いやいや、あの姉さんだったらぜってー『あ、別人なの。へー全然気が付かなかった』で済みそーだけどな」

「・・・そうかも」

いいも悪いも変な姉を持ったものだ。

姉がいないのをいいことにさっさと魔法を使って荷物の運搬を終わらせた二人は、リビングで雑談を始めた。

「あー・・・学校はどうだ。慣れたか？」

なんかお父さんみたいなの質問だったが、ミウは真面目に答えた。

「うん。結構楽しいんだね。面白い」

「そっか、ならよかった」

「篠原は、楽しい？」

「・・・うん。結構」

「それならよかった」

・・・なんだかバカな雰囲気漂う会話をしばらく続けた。

まあ、お互いそこそこ楽しそうだったのでいいかと。

「あー、なんかあつたら俺に言えよ？」

「ん。わかった。篠原もなんかあつたらわたしに言ってね？」

「・・・うん」

2 3 「そんなこんなで」(後書き)

日常系書くの苦手なんで次からもつ本筋入っちゃいます。・・・せ
っかちなんで。

間章

本当に、なんでもない日だった。

どこにでもあるような、誰にでもやってくるような、そんな日で。

平和な日を楽しもうとか、そんな風に思わないくらいに普通な日だった。

でも、それは勘違いだった。

全然、わかっていなかったのだ。

「ねえ、篠原くん」

「ん？」

隣の席の少女が突然話しかけてきた。

今までそんなに話したことがなかったので少しおかしく感じた。名前は、そう。確か高橋とかいう普遍的な苗字だったはず。

どこにでもいそうな子で、特徴といえば右目に付けられた眼帯くらい。

「事故で目がつぶれた」、とかそんな話だった気がするが、それ

でからかわれたりしているのは見たことがないし、本当かどうかわからない。

結局、嘘だった。

「前から聞いたかったんだけどさ」

高橋は、いつもと変わらない笑顔でこういった。

「なんで中に『真実』が入ってること、みんなに黙ってるの？」

今日も平和だと、誰かが言った。

いつまでも平和でなんて、叶うはずのない願いだった。

明日が駄目でも明後日は、明後日は駄目でも明々後日は。

それが駄目でも来週は、来月は、来年は。

いつかそんな日が訪れるように。

そのために戦うのだと、誰かは言った。

どんなにそれが遠くても、

抗い続けるのだと、誰かが誓った。

だから、世界は続いていく。

思いをすべて、受け止めて。

第三章 3 1 「思いもよらない」

思わず、息が詰まった。

呼吸がうまくできなくなり、心臓が激しく鼓動する。

それでも、外見だけはとぼけた風を装った。

「 真実って、一体何の？」

皆 主に魔法使いの視線が集まる中で、必死に考え続けた。

なんでバレたんだ。どうやってわかったんだ。

そもそも、高橋は魔法使いだったか？

いろいろな疑問が渦巻いて、解決する前に消えていく。

篠原が自分にかけていたのは、主に慣れからくる油断をさらに強化させる魔法で、他の人間と違うところがあっても「いつもこうだから」と思わせて、気にしないようにさせるものだ。だから、絶対にクラスメイトにはばれないと思っていた。

なのに、何故。

高橋は、変わらない笑顔のまま言った。

「ああ、そっか。バレたらこうなっちゃうから言わなかったんだねなるほど。でも、隠し続けるなんて大変だったんじゃない？」

一体何人くらい追手の魔法使いを殺したの？」

怒鳴って否定したい気持ちを押し殺し、不思議そうな顔を作ってから質問する。

「いやだからさ、お前何のこと言ってるんだよ」

「隠してもさ、無駄だよ？」

進まない会話にイライラし始めたとき、藍氏が口を挟んできた。

「何を言っているんだ、高橋女史。一般人の篠原が『真実』を持つ

ているはずがないだろう。こいつが普通なのは僕が保証する」

失礼な言葉だったが、今はありがたかった。

高橋は動じず、訂正する。

「違うよ、藍氏君。私は、『持つてる』んじゃないかって、『中にある』って言ったの」

「中・・・？」

高橋はゆっくり、語り始める。

魔法使い全員に向けてるようにして。

「何十年前、ある一人の魔法使いが魔法を新しい方向に導くために必要だとされてきた魔導書『真実』を見つけ、ひそかに研究を始めた。それを見つけたとある団体が、『真実』を引き渡すように魔法使いに申告したが拒否。その後その魔法使いを捕まえたが、『真実』を所持していなかった。だから、どこか別の場所に隠された後だったとされた。でも、それは大きな誤り」

人間も黙り、クラス全員が静かに高橋の話に聞き入る。隣のクラスの話声が、とても遠く聞こえた。

高橋は話を続ける。

「追い詰められた魔法使いは、自分の中に『真実』を隠した。そして、ある魔法をかけた。最強の転移魔法『輪廻の先に』。他人に触れば『中身』が移り、やがてこの世で一番それを持つのにふさわしい者のもとへ着くまで永遠と転送を続ける。それが、

篠原君だっただけ。一部の人たちは気付いてるみたいだけど、混乱を恐れて公表はしてないみたいだから、知らなくつてもしょうがないかな」

人間たちには間訳が分からず、わかった魔法使いたちも疑いの目で高橋を見つめる。

そんな話をいきなり魔法使いでもない少女に言われたところで、信じられるはずがなかった。

高橋はため息をつき、

「そうだよ。そんなこと口だけで言われたって信用できないよね。

「だったら。実際に見せれば納得するよね？」

嫌な予感がした。でも、飛び退く前に高橋が動いた。

高橋は篠原の胸のあたりに、手を突っ込んだ。

予想していた『血が飛び散る』という現象は起きず、すっと入っていた。文字通り、中に。

冷静に、だとか、ばれたらまずい、だとかそんなことを考えている暇はなかった。

本能的に、高橋を思いつきり蹴り飛ばしていた。

全員が、固まったままその光景を見つめる。

床に打ちつけられた高橋が、起き上がって篠原を指さす。

「ね？普通の人間だったら、どんな魔法を使っても血が噴き出るだけ。例外は 既に中に何か入っている場合のみ。・・・まあ、皆が魔導書なんて大事なものを人間に任せたりする人がいるとは思っていなかったからこそ盲点になったんだろうけどね。で、篠原君。そろそろ認める気になった？」

「いよいよ、ごまかすことは不可能になったようだ。」

篠原は覚悟を決めて、ニヤツと笑って見せた。

「ああそうさ。魔導書『真実』は俺の中にある。 欲しい

んなら、力づくで奪ってみれば？」

いつも魔法使いを殺すときのように、白黒の剣を取り出す。適当に構えてみせると、人間たちはもうすぐ授業が始まることも忘れて逃げ出した。残ったのは麻衣のみ。（中身は魔法使いなので当たり前と言ったら当たり前なのだ）

どうするべきが全員が悩んでいた時、藍氏が動いた。

「・・・なるほど。それは盲点だったな。しかし、見つかったんなら良しとしよう。篠原、悪いが全力で行かせていただく！死んでも恨むなよ！」

篠原は、こんな状況でもまったく普段と変わらない藍氏に笑って見せた。そして、初めて『真実』と会話したときに教えてもらったことをそのまま教えてやった。

「ああ。もちろん。俺も全力で行く。でも、一応言っておくか。

『真実』を取られたら、俺は死ぬらしい」

「なっ・・・!?!」

心の中では生かそうと思っていた藍氏は、心底驚いた。

動揺を隠せないクラスメイト達に、篠原は確認する。

「人殺しになりたくない奴は帰れ。しかし、それでも真実が欲しい
っていうんなら 遠慮なくかかってこい」

争いからは何も生まれないだなんて、そんなの嘘だ。

第三章 3 1 「思いもよらない」(後書き)

続けばいいなあ・・・

3 2 「戦いとためらい」

初めは、自分の頭がおかしくなったのかと思った。

だって、姉に触った途端、二人しかいないはずの家に違う人の声が聞こえてきたから。

耳をふさいでも、その声は途切れることはなかった。

日本語だったのならまだしも、雑音のような音だったのだから最悪だ。

仕事で姉はいなくなり、誰にも相談できないという状況はまさに地獄だった。

しかし、唐突に変わった。

「あーあー。聞こえてる　？そつろそろ当たってほしいんだけどな　」

「え？」

いきなり、日本語になった。

「ああ！そうかここ日本か！なんだそれなら早く言えよ。しっかしいつの間に大陸横断してたんだ・・・？」

どうやら、今までの雑音は他の国の言葉で話しかけていただけだったようだ。

「いやー、悪いね。お前が適合者らしいんだ。ちょっと住ませてもらうぜ」

「は・・・？」

しばらく魔導書についての講義、魔法使いに狙われること、その理由などを話した。そして、最後に。

「ちなみに、俺が奪われるとお前は死ぬから」

たったそれだけの言葉に、乗せられた意味は重すぎた。

「……つっても、どうやって戦うよ？」

「はあ？いつものよーにやればいいじゃん。同じ魔法使いだぜ？」

あ、その前に結界でもはつとけば？」

「ああ、そうだな」

篠原は二、三言呪文を唱えた。

すると、足元に光で構成される魔法円が現れ、広がり、やがて学校を覆い尽くした。

人間も魔法使いも人形のように硬直し、不自然な態勢から動けなくなった。

もっとも、この教室内だけは水代の防御魔法に阻まれて止まることはなかったが。

「ええつと、時空制御『停止結界』……だっけ？」

「そうそう。お上手お上手」

おふざけの最中も、剣は構えたままだった。

魔法使いは、一応戦闘態勢を取りながらも、戦うことには気が引けているようだった。

何せ相手はクラスメイト。そもそも現代では戦う機会も少なく、学校で行う模擬戦闘くらいのものだ。

それに対して篠原は戦闘のエキスパートといってもいいほど実戦経験には長けている。

しかし……

「数が不利すぎねえ？」

「当たり前だろー。まあ、時間止めたからこれ以上は来ないと思うぜ？」

クラスにいた魔法使い、隣あたりから来た魔法使い。ざっと百人はいた。

軽口をたたいているのは篠原くらいで、そのほかは真剣な顔つきで佇んでいた。

いや、例外が一人。

「ねーしのはら。しんじつーがそんなかにはいつてるってのはほんとつばいけど、まじ？」

水代は、相変わらずの緊張感のない声で語りかけた。

篠原も同じく緊張感のない声で返す。

「あーほんとほんと。だつて魔法使えてんじゃん。もし真実

じゃなかったとしても、そこそこの魔導書が入ってるんじゃない？」

「おー。そうだねー。だつて、『ていしけっかい』は、おとながにさんにんではつどーするようすっげーまほうだもん。・・・でもつよそーだよね。めんどくせー」

その瞬間。水代の周りに魔法円が出現し、一番得意な炎魔法を篠原に向かって発動させた。

飾りっ気のない力押しを狙った炎が、篠原を覆い尽くす。

「なあ。だからはやくおわらせよーとおもっただけど、どーよ」

「・・・ああ、そうだな」

声は、その中から聞こえてきた。

篠原は剣を一閃し、炎を振り払う。ついでに結界をはっておいたので、まったくの無傷。

「その意見には同感だよ。だつてお前強そうだもん」

水代は「けっ」と舌打ちして、それから周りの生徒たちに喋ける。「なんでだまってみてんの。『しんじつ』がてにはいるんだよ」

「人間一人の命くらい、惜しくない」

全員が息をのんだ。

篠原は、『お前を殺す』と意味の等しい宣言をされたくせに、けらけらと笑っていた。

「おーそーだぞ。お前ら、俺くらい殺せないと立派な魔法使いなんか到底なれないぜ?」

「そーいうこと。。。じゃ、いくよっ。」

「かかってこい!」

こうして、ためらいは終わり、ようやく戦いが始まった。

3 2 「戦いとためらい」(後書き)

アクションシーンは苦手なんですけど・・・頑張ります！・・・
多分。

3 2 裏面「予定調和と因果の外れ」

開戦までに、水代と篠原は敵を演じつつ、共同戦線を張ることを決めた。

そんな時間があつたのかと思うだろうが、この世界には魔法というものがあるのだ。

篠原が停止結界で時間を止めて見せたように、水代も同じようなことを行つた。

ただし、使つた魔法は違つたが。

「因果断絶『ゼロ次元』」

因果を絶ち、一秒を永遠に引き延ばす魔法。それが因果断絶『ゼロ次元』らしい。

らしいというのは、水代が作つた魔法だからだ。

ちなみに、一般的な魔法の中で、これと同じ方式の魔法は存在しない。

なぜなら、因果に干渉するのは中々骨の折れる作業で、別にそんなことをしなくても比較的簡単に干渉できる時空を扱つた、『停止結界』があるからだ。

停止結界は、いくら難易度が高いとはいえ、水代だったら余裕で使える魔法だ。

それでも水代がゼロ次元をわざわざ使つたのには、『破られにくい』という利点があつたからだ。

停止結界はポピュラーであるがゆえに、破る方法も数多くある。

それに比べて、ゼロ次元は有名どころか水代しか知らない技であり、この学校に瞬時に仕組みを理解し破る方法を思いつくような天

才は自分しかない。

その判断は正しく、水代は篠原と二人きりになれる状況を実現させた。

「人殺しになる覚悟が　　って、あれ？」

いつの間にか手に持っていたはずの剣がなくなつて、しかも周りに水代しかいなくなつていた。

そんな状況に置かれた篠原は驚きつつも、己の中にある魔導書に問いかけた。

「なあ、ここって　　って、あれ？」

二度目の驚きは、中に何もなかったこと。

魔導書『真実』が、自分の中のどこにも見当たらない。

「せいこーしたみたいだね　　。『しんじつ』がしのはらといしきをけつごうさせてなくつてよかったよ　　。いんがだんぜつ『ぜろじげん』はさ、いしきしかもってこれないんだよね・・・かいりよーはやつぱしひつよーかなあ」

相変わらずのマイペースで話し出す水代に、篠原が説明を求める。水代は簡単に説明してやり、間を置かず本題に入った。

「まどーしよをきりはなしたって、しぬわけない。いくらとくしゆでもてきごうしゃでも、どうかするなんてありえない。『しんじつ』は、しんじつなくせしてうそついでるよ。あ、ひとつれいがい。『しんじつ』がきりはなしたときにしのはらをころしたらせいりつするね」

その場合　　。

「俺がお前のことを殺す、の間違いだけど・・・意図的にやったのかな？」

篠原はしばらく考えてから、

「・・・お前つていきなり普通の話し方になるのが怖いよな。それも意図的？」

「ちやかすな」

水代は不満げに頬を膨らませた。

篠原はひらひらと手を振って、

「冗談だよ冗談。・・・えっと、知ってるよ」

「しってる？じゃあ、なんで」

篠原は少しだけ迷ってから、その理由を語り始めた。

長くも短くもない、その理由を聞いた後。

二人はこれからの予定を話して 開戦することを決めた。

そのほうが、都合がいいと判断したから。

「じゃあ、共同戦線、よろしくな」

「おーよ。まかせとけ」

男らしく、（片方しか男じゃないけど）拳と拳をぶつけ合って、二人は協力することを誓い合った。

水代が魔法を解き、篠原は気を取り直して言つつもりだったセリフを言った。

「人殺しになりたくない奴は帰れ。しかし、それでも真実が欲しいっていうんなら 遠慮なくかかってこい」

3 3 「再登場と後半戦」(前書き)

今更ですが、キャラの見た目のこととか書くの忘れていたことに気が付きました。・・・時すでに遅し。

3 3 「再登場と後半戦」

実戦経験があるのとないのとでの差は、結構大きかったようだ。

大体、こんな狭い空間では仲間に魔法が当たってしまう可能性も高いし、うかつに攻撃することはできない。

それに、今日初めて仲間として戦うのだ。連携なんて取れるはずもなく、計画性のない攻撃を放ち続ける。

対して、篠原は一人。仲間がいないのだからどこに放つても自分には当たらないし、逃げ場も少ないために当たりやすい。数は不利だがその点に関してだけは圧倒的に有利だった。

唯一篠原に一对一でも勝てそうな水代は、つかれたーとか言っって壁に座りながら寄りかかって、一応攻撃しているようだ。あんなことを言っていた割に、一生懸命さは微塵もない。

自分で魔法を使わなくても勝てるかと確信した篠原は、あの白黒の剣だけですべての攻撃を対処していた。

伝説とまではいかないもののそこそこ貴重な剣。白と黒のコントラストが美しい、その剣の名前は『聖魔剣』

聖剣でもあるし魔剣でもある。聖剣でもなければ魔剣でもない。魔法に触れるだけで打ち消すことができるという世にも珍しい特殊効果を持っていて、内部には魔法が仕込まれている。多少力を込めただけで、そのとある魔法が発動する。

それは、

「 斬撃『紅三閃』くれないさんせん 」

一回振るだけで、三回分の赤い斬撃が敵を襲うという便利な技。聖魔剣の製造者が開発した魔法で、しかも内部に仕込まれているので解析が辛い、さらに何年も前から行方不明になっていたので、

とつさにできたのは薄いバリアをはるくらいで、そのおかげで壁に叩きつけられることはなかった。

何が何だかわからない状況で、廊下にいた唯一の人間いや、魔法使いは、その破壊された壁を見て頭をかいた。

「しまった。．．．ちよつとやりすぎましたかね」

その声を聴いた藍氏（水代の隣に座り込み、ちやつかり結界の中に入れてもらっていたずるいやつ）が軽い声を上げた。

「おお、イクサ君ではないか。今頃とは、随分と遅いご登場だな」

「．．．ああ、藍氏先輩。一体どういう状況ですか。出入不能の『灰色迷宮』がかかったので、とりあえず吹き飛ばしてみたくんですけど」

『灰色迷宮』は出入り口はあるけど、理由もなく『入れない』と思いつくようになる魔法で、ちなみに万が一にも逃さないようにと水代がはったものである。

「あーたしかに『はいいろめーきゅー』はとびらほんたいにのみかけてあったけどさ．．．けっかいだつてはつといたんだよ？それわかるがるふきとばさないでほしいね．．．ターゲットが逃げるだろ」

「それはすいません。僕が悪かったです」

最後の豹変にも怯えず驚かず、自分が悪いとは明らかに思っていないであろう表情と雰囲気のままぺこりと頭を下げた。

「で、もう一度聞きますが、一体どんな状況ですか」

それは、代表して藍氏が教えた。正確に、篠原を指さしながら。

「ふむ。単刀直入に言うよ　あいつの中に魔導書『真実』が入っている。手に入れるには実力行使しろ、と本人が言っていただから、その最中だ」

それは、普段遠回りな言い回しを好む藍氏にしては実に率直な言葉で　イクサを焚き付けるには十分な言葉だった。

イクサは一回だけうなずくと、篠原に一步近づいた。

「わかりました。　殺つて、いいんですね」

「構わない。遠慮なくやればいい」

イクサは、魔法使いにはふさわしくない、ボクシングのような構えを取った。

そして一瞬で篠原との間合いを詰めると、思い切り殴りにかかった。

「 打撃『破拳』」

扱いがひどく難しいため、誰も使おうとしなかった技。『破拳』は、文字通り拳ですべてを破壊する。

強度も素材も古さも生物も無生物も魔法も物も関係なく、殴ったものは問答無用でぶち壊す。

当然一発で終わらせるつもりで出した。当然受け止められるはずがないと思った。

しかし、

「そんな簡単に俺に勝てるわけないだろ？」

問答無用で魔法を打ち消す聖魔剣で、篠原は『破拳』を受け止めていた。

「・・・へえ」

イクサは興味深げな目で篠原を観察すると、一旦飛び退いた。

「見た目に寄らず強いんですね」

「そりゃどうもー。そっちもほっそこい体な割に怪力なんだな。

まあ、ゆっくり楽しもうじゃないの」

「はい。若輩者ですが、どうぞよろしく」

魔法使いと『真実』の戦いが終わるには、まだまだ早すぎる。後半戦に延長戦。

争いは、続いていく。

3 4 「真実の真実」

普段ほとんど表情を変えない水代が大きく目を見開くくらい、それは激戦だったとか。

「わーお。すごいねー。いやー、なはたいをあらわすとゆーけど。・
・はんぱねーなあ」

「ああ・・・たしかにな。激戦というにふさわしい戦闘を見るのは初めてとっていい。・・・時に、水代」

「なーにー？」

「君は参加しないのか？」

「・・・これいじょーうごいたらー、だっすいしょうじょうでしぬ

」

「・・・まあ、どうでもいいが」

「おいおいおいおい！ちよーつとは手加減してくれよお！？」

「はあ。無理ですけど 『破拳』三連打」

「だーもう！『紅三閃』！」

二人の放った魔法が空中でぶつかり合い、爆発音とともに消えていく。

イクサの拳から放たれる魔法を聖魔剣でいなしつつ、気をそらせるためにある質問をする。

「なあ、お前ってなんで『真実』が欲しいんだ？」

「・・・？なんでそんなこと聞くんですか？」

「気になったから。それ以外の理由があるのなら言ってくれ」

イクサは、一瞬だけ動きを止めた。しかしすぐに動き始める。

戦闘を続けつつ、とある理由を話すことにしたようだ。

「まあ、聞いてもらおうほどの話じゃないんですけど。俺って、今、勘当中なんですよね」

「・・・はあ」

「で、『真実を持ってきたら許してやる』みたいなこと言われたんで・・・正直言っただけで帰りたいとは思ってないんですけど」

「じゃあやめとこうぜ!」

「それは嫌です」

「何故!」

イクサは篠原から距離を取った。そして、次の魔法を発動するための魔法円を出現させる。

そして、質問の答えをつぶやいた。

「会いたい人が、いるから」

地獄耳の篠原はちゃっかり聞いていたらしく、居合抜きのような体制に剣を構えながら

「・・・そうか」

と言っただけだ。

空気の読めない水代さんが、いきなり声援を送りだした。

「しーのはら。がんばれ」

「・・・そりゃどうも」

そんなやり取りを気にせずに

イクサは、魔法を発動する。

「空間破壊『次元粉碎』」

その瞬間、教室内のものすべてが文字通り、割れた。

窓ガラスを割ったかのように机も椅子もロッカーも、粉々に砕け散る。

とつさに結界を強化した水代と藍氏、聖魔剣によって守られた篠原は無事。

ずっと隅っこにいておかしくらい微動だにしていなかった麻衣（に扮したミウ）と高橋はよくわからないがなんともなかった様子

で、床に倒れていた生徒たちにも影響はなかった。

「ああ、そうか。停止結果はつてあったんでしたっけ。干渉しあつて威力が小さくなっちゃったのか・

・本当は床と天井を落として地面にたたきつけてやろうと思つたんですけど」

「・・・こえーこと言うなよ。ああ、でも半分だけ同意見だよ」

「?どこがどう半分なんですか?」

答えを聞く前に、天井が落ちてきた。

「!」

魔法を使うにも逃げるにも、時間がなさ過ぎた。

あつという間に、天井の下敷きにされる。

「天井を落とす、つてとこだけ、な」

天井の瓦礫の中にイクサがいること確認してから、篠原は聖魔剣を体の中に収納した。

それから、水代と藍氏がまだ残っていたことを思い出して、

「どうする、やる?俺はいいけど」

二人は、もちろん即答した。

「断る」「ばす」

藍氏は一応クラスメイトを助けてやろうと、治癒系の魔法を行使していた。

しばらくすると、何人かが顔を上げる。

「おい、イクサクーん。だいじょーぶか?」

篠原は死んでたら困るので一応呼びかけてみた。

「・・・」

反応、なし。

「おい。返事しろ」

反応、なし。

「イクサクくん!?生きてるよね!?!」

反応、な

がつ、と一本の手が伸びてきた。

その手で瓦礫をかき分けて、ようやく本人の顔が現れる。

「・・・生きてます、一応」

篠原はほっとして右手を差し出す。

イクサはその手を握り、起こしてもらおう。

「そりゃよかった。怪我は・・・治してやるのか？」

「・・・大丈夫です、自分でできます」

魔法使いは便利だなーと思いつつ、微笑し続ける高橋に問いかける。

「・・・お前は参加しなかったんだな、高橋」

「ん？ああ、だって、私は魔法使いじゃないから」

だったら何故わかったのか、聞きたいことはたくさんあったが、先に高橋のほうが質問してきた。

「ねえ、篠原君は不思議に思わないの？」

「・・・何を」

高橋はもったいぶって口を開いた。

「『なんで自分は人間なのに魔法が使えるのか』」

篠原は答えない。『真実』も黙ったままだ。

「『真実』さん・・・もう、隠しきれないんじゃないの？言ってみれば？」

「一体何を言うんだよ？」

とぼけたふりをする真実。高橋は、まどろっこしくなったの自分で言った。

「『真実』は、人間が魔法を使うための魔導書だったことと、」

「『真実』は、ただの人間を原材料に作られたってこと」

「
た
っ
た
そ
の
、
ー
ー
っ
だ
よ
」

3 4 「**真実の真実**」(後書き)

次から回想に入る予定です。

間章 2

『真実』は、隠すことをやめた。

諦めて、すべてを話すことにした。

自分が知る限りの、全てを。

「篠原、お前に言った『真実』の情報は全部嘘だよ。んで、そいつが言ったことは全部真実だ」

何の感情も込めないように、平静を装った。

何でもないように、まるで世間話でもするかのように。

彼は昔話を始める。遠い過去を、自分が人間だったころの話から。

「ちょっと長い話になるが・・・まあ、聞いてくれ」

空を眺めた。

生憎曇っていたけれど、明日は晴れるのだからいいと思った。

晴れていても曇っていても雨が降っていても、

いつでも空は空だった。

何百年もたった今になっても

それは変わらない。

空は、あの日からずっと続けている。

第四章 4 1 「過去と回想。それから」

彼は、普通の少年だった。

もう名前すら思いだせない彼が他と違っていたのは、家が裕福でなかったこと。そのくらいだ。

両親の稼ぎは普遍的な家庭と同じだった。

しかし、彼の妹は病人だった。

薬代が家計を圧迫し、看病のために母親が働きに出ることもかわない。

だから、彼は迷わなかった。

「君、お金が欲しいんだろう？僕たちに協力してくれば、君の家族の生活は保障してあげるよ。君の命は、残念ながら保障できないんだけど」

その言葉は、本当だった。

突然父親の地位が上昇し、結構な給料がもらえるようになり、妹の病気も何の影響かは知らないが改善の兆しが見えてきた。

自分の選択は間違っていないかった。

たとえ自分が死ぬことになっても、家族が助かればそれでいいと。

彼は大した別れも告げず、約束された場所へ向かった。

4 2 「出会いとか」(前書き)

色々設定とか適当にしてた代償がやってきました。・・・矛盾しすぎ。

4 2 「出会いとか」

「やあもおあれは死んだほうがマシってレベルだったなあ。激痛つーかね？もう痛すぎてよくわかんねえんだよ」

彼はその時のことをそう語った。

「そんな時は魔法とかよく知らなかったからわかんなかったけど、今じゃなんとなくわかるね。

俺の中に全部流しこんで、そのあと本の形に形成しなおしたんだ。・・・正直言つて人間の形にしてほしかったなあ」

あの頃、彼の住んでいた場所の近くで、とある研究が行われていた。

それは、人間が魔法を使うための研究。

行っていたのは、一人の人間と魔法使いで、恋人同士でもあった。種族の違いから悩んでいた二人は、人間が魔法を使えば対等になれると思いついた。

研究は進んだ。

最後に、魔導書を形成すれば終わりだった。

そのためには、人間が必要だった。

そのために、貧乏な、金で命を売ってくれるような人間を探した。そのために、ある少年の家族が金持ちになれるように魔法で仕向けた。

少年は、やってきた。

儀式魔法は成功し、魔導書は完成した。

でも・・・

「あー、間一髪で間に合わなかった、って感じかあ」

魔法使いがやってきたのは、その直後だった。

二人をあっという間に殺し彼、いや、魔導書を手に取った。

「そんな軽々しくいわないでください。人一人、犠牲になったんですよ?」

「悪い悪い。で、これどうするよ」

「燃やしますか?」

「えーそれはもつたいなくね?」

「それはそうですね。・・・対策を練るためには必要だし」

「じゃあ決まりな。よかったなあお前。燃やされなくてよ
お」

魔法使いは本の表紙に手を当て、魔法を使ってタイトルを焼き付けた。

『真実』と。

「やっぱり、これが一番ふさわしいだろ?」

こうして、彼はその後何百年もの間、ある図書室の片隅に保管されることとなった。

そこにあることすら誰にも知られず、存在すら伝説級に扱われ、そこにおいて行った魔法使いもすでに死んだ。

見つけたのは、図書室を端からあさっていた少女。

見つけたのは、ただの偶然だった。

「へー『真実』かあ・・・おもしろそーじゃん」

4 3 「もう元には」

『真実』を家に持って帰って帰ってペラペラお菓子片手に眺めていた少女は、しばらくするとけらけら笑ってこういった。

「ああ、駄目だねーこれ。惜しいとこまでいってんだけどね」

「え？何が」

思わずしゃべってしまった彼は、少し後悔しながら次の言葉を待った。

「・・・ああ、君？」

少女は『真実』をぼんぼんと叩いた。

「へー喋れるんだ。びっくりー」

そんなに驚いていないようだ。まあ、魔法が普通に存在するような世界なのだから別に本がしゃべったところで驚きはしないか。

「あつそ。・・・で、何が駄目なんだよ」

「ん？あー。その前に、君って魔法に詳しくかったりする？」

「全然。人間だもん。元だけ」

「じゃ、簡単に説明するけどさ、根本的な式が間違ってるんだよ。

だから、この魔法は発動しない。発動しようとした瞬間に 矛

盾に直面して爆死でもするんじゃないかな？」

「・・・怖いことを軽々しく言うなよ」

「そう？怖いかな？ でも改良すれば完成するかもよ」

「へー」

「すっげー面白いんだよねーこれ。はっそーが貧困なクソジジイに見せてやりたいぜー・・・でも駄目か」

「なんでー？見せてやりやいいじゃん」

「とられそう。『貴重な資料として私たちが嚴重に保管してやる』

ーとか言いそう。つーか言う。・・・せめてしっかり研究してからじゃないとねー」

「ふーん・・・」

少女はページをめくり続ける。時々お菓子をつまみながら。

「へー・・・人間だから使えないんだっていうんなら、人間から外れてしまえばいいって考えかあ。なるほどなるほど」

ふんふん頷いて、『**真実**』語りかける。

「君が使われたのも、『人間の外れた形』の例として、想像しやす
いようにだろーね」

「・・・気軽に言ってくれますね」

「えへへ。そんなにほめないですよ」

「あの、まったくほめてないし笑いごとでもないんですけど・・・

・ちなみに一応ついでに聞いておくけど、俺って元の体 じゃ
なくてもいいけど、人間の形に戻れたり、する？」

「えつとね、可能性すらゼロだぜ」

「あ、やつぱり？」

「でも、これからはわたしが一緒にいてあげるからさあ。仲良くし
よーね？」

「・・・あー、うん。はい」

4 4 「逃亡、しまじょうか」(前書き)

ああ、また意味不明になってしまったとき。これでも頑張ってくださいね。

4 4 「逃亡、しましょか」

「んしょ、えつと、あつと。うん、かんせーつと」

部屋の中には本ばかり。そのすべてが魔法関連のもので、机の上にも何冊か広げられていた。

少女は、ペンを片手に持ったまま自分が訂正した箇所、それから全体像を眺めて、満足そうに頷いた。

「ん。これで人間でもまほーが使えるようになるよー。すっげー」
今彼女がやっていたのは、直接『真実』にペンで訂正を入れるという行為。

少しでも間違えれば恐ろしいことになるというのに、少女は緊張した様子もなくやり遂げた。

「へーそりゃよかつたな。で、どうする？俺を売り渡す？それとも人間に使ってもらってみるか？」

少女の答えは、そのどちらでもなかった。

「このまま放置する」

「へ？」

驚いた『真実』は聞き直した。

「このままなのか？折角訂正までしたのに」

少女は机の上の本を片付けながら、答える。

「うん。訂正してるうちにさあ、わかっちゃったんだよね。これは使わないのが一番だよ」

「使うとなんかあるのか？人類が滅びるとか？」

ふざけて言った言葉に、少女はにこつと笑い、

「半分せーかい。これはさ、使うと魔法使いが滅びる仕組みになっちゃってんだよね」

「いつ!？」

最後に少女は『真実』を閉じて、表紙を撫でてやった。

「だから、使わない。あ、でも適合者がいたら使えるかもしれないけど」

「てきごーしゃ?何それ」

「うーんとね。滅びる原因はさ、多分人間が使おうとすると最終的に魔法使いの存在を否定するよーになっちゃうからなんだよね。魔法自体が原因なんじゃなくて、使う人間の問題なんだよ」

「ふーん。つまり、半端ない善人さんなら使えるってこと?人間も魔法使いも全部受け入れられるような」

少女はけらけら笑って否定した。

「いやー君ってなかなか詩人なんだねえ。そんなヤツ、この世界に存在するわけないだろうよ。見た目はそれで自分でもそう思っているよ、大体のやつは無意識のうちに誰かを軽蔑しているもんだぜ?」

少女はえーとねーとつぶやいてから、これまた存在しなさそうなやつをあげた。

「自分ではわかってなくっても、自分を含めたすべてがどうでもいって、心の奥底で思っているようなやつかな?突然親が死んでもしようなないとか言っちゃうような、さ」

『真実』はしばらく押し黙った後、

「・・・そんな奴いるわけねーだろ」

「あ、やっぱりそーだよな。あははっ。じゃあ結局、使えないってことで」

「ホントに俺って運悪いーのな。使えない魔法のために本になっちゃうとか・・・」

冗談のつもりで言ったのに、少女は笑わなかった。

それどころか、今まで聞いたことがないような真剣な顔と声で話し始めた。

「・・・それが、そうでもないらしくってさ」

「はい？」

「君は今魔法使いから追われてるんだよね」

「なんでまた。必要ないからずつと仕舞い込まれてたんだろ？」

「ううん。君の存在を覚えてる人がいなかっただけさ。回収した人もとつくに死んでるはずだ。しかし近年、その人の日記が見つかったらしく、そこに何を回収したか、どこに置いたか書かれてたんだと。．．．ちなみに君のことは報告されていないんだって。燃やされたことになってるらしいよ？だから追われてる。なんでも、新しい魔法に進化するために必要らしいけど。よくわかんない」

「なるほどな．．．で、お前がこれ持ってたら相当まずいんじゃないの？」

「えへへっ、そうだよ。殺されちゃうかもなあ、バトルできないし。魔法は苦手なんだよねえ．．．得意なのは研究だけだからさ」

「じゃあさつさと手放せよ。俺はいいからさ」

「そうはいかないさ。お偉いさんが気付くかわかんないし」
「何に」

「ないしょ。君が知っててもしょうがないしね．．．さ、行こうか」
外に響き渡る大きな足音。囲まれている気配。気が付かれるのは想像以上に早かった。

少女は壁に立てかけてあった白と黒の剣を手取る。

「聖剣でも魔剣でもない聖魔剣　これがあれば、まあ少しは逃げられるかな」

「逃げてどーすんの」

「時間かせがないとき。もうすぐ君を永遠に逃がすための魔法が完成するんだよ」

少女は『真実』を胸に抱え、瞬間移動の魔法を発動させた。
本しか持っていない少女は何の未練もなく、そこを去った。

逃亡劇は始まり、そして現代にわたっても続いている。

4 5 「回想終了」

「とまあ、それが真実つてわけよ。悪いなあ篠原。俺つてホント嘘吐きだよな。でもさ、絶対本当のこと言われたら手放すだろ？だって、もし使われたとしても、人間のお前にはまったく関係ないんだもん。それだと、困るんだよ。俺にはまだ。あいつの言った言葉の意味が理解できてないから」

『真実』は、笑った。

「嘘吐き魔導書は間抜けな人間と大量の知識によってできている

それがこの俺の唯一の真実さ」

全てを黙つて聞いていた篠原は、居心地悪そうに頭をかいて、こ
ういった。

「えっと、ごめん。全部、知ってた」

「はあっ!？」

人間だったらひっくり返っているであろう勢いで真実は叫んだ。

どうやって知ったのか、何故知っているのか。誰かが吹き込んだのか。だとすれば、一体誰が？

「うーん、強いて言えばお前かな。そのお前を完成させた魔法使いさんのおかげでもあると思うけど」

「何言つてんだよ！俺はお前に本当のことを話したことなんて一度も

「うん。話してもらったことはない。一度も」

「だったら、なんで知ってるんだよ」

「だってさ、お前の思考つて、最初から最後までダダ漏れだったんだもん」

「・・・えつと篠原サン。もう一度言っただけですか？」

「だって、お前の思考って最初から最後までダダ漏れだったんだもん」

一言一言強調して言ってやると、ようやく真実は理解したようだ。「おっ前そんな恥ずかしいこと今までずっと黙っていやがったのかあっ！！！！！」

「あはつはつははー。お前だって黙ってたんだからお相手だろ？」
「全然恥ずかしさが違うじゃねえか！」

篠原はまだ起こり続けようとする『真実』をなだめて、いよいよ本題に入った。

「これでおしまい　　とはいかないんだよ。まだ、重要な問題が残ってる」

「・・・なんだっけ」

とぼけた、というより本気で忘れてしまったようだ。

篠原は、平然とたたずむ高橋を指さした。

「高橋の正体。・・・残ってるのはそのくらいしかないだろ」
指名された高橋はにこつと笑った。

「ちなみに、私が自分で自供するようなバカなマネをするとと思う？」

「思っていない。だから、時間を稼いだんだろ。　　水代」

高橋から視線を外し、寝転んでいる水代に向けた。

水代は起き上がり、不敵にわらって見せる。

「おーけー。・・・まほーつかいじゃないってのはほんとーみたいだねー。ふつうに、きおくのぞけちゃったもん」

「・・・ああ、そういうこと」

もうお分かりだろう。

開戦前、水代と篠原が話したことは、こういうことだった。

篠原が戦って時間を稼いでいる間に、水代が高橋の精神に入り込み、正体を探る。（逃げられないように『灰色迷宮』をはることも忘れずに）違和感なく合図を出すために、終了したら水代がどんなことでもいいから篠原に話しかけることを合図とした。（まさかそれが応援だとは思わず篠原も面食らったが）その合図を聞いて篠原

は決着を決め、そこで高橋の正体を水代が発表する　　という手筈だった。ちよつと途中で余計な回想が入ったが、大体は予定通りに進んだ。

水代は変わらない口調で、高橋の正体を説明し始めた。

「たかはしーはさ、にんげんだけど、いちぶだけちがうみたいなんだよねー」

「一部つて、もしかして」

「そー。せーかい」

水代は強く誰かをにらんだ。そこにいない、誰かのことを。

「まほーじゃきおくはぜんしんにやどつているとされる。のうにちかいぶぶんほど、つよいきおくをもっている。とーぜん、それをほかのやつにまほーてきなしゅだんでいしよくしたら、きおくもうつる。かのじよはまちがいなくにんげんだよ。そのみぎめをのぞいては」

「彼女が移植されたのは、あの魔法使いの目だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9225u/>

嘔吐き魔導書は間抜けな人間と

2011年8月26日03時27分発行